

# 解説

4歳児（幼稚園）「悔しい気持ちに向き合う～4歳児の始めたラグビー～」

企画：お茶の水女子大学附属幼稚園 教諭 佐藤寛子

実践者：佐藤寛子・佐々木麻美

タイトル：園児が自己制御力を発揮した「ラグビー遊び」

コンピテンシー育成開発研究所 特任准教授 下島泰子

2人の園児が、園庭でボールを取り合う遊びをし、ラグビーと似ていると教師に伝えたことがきっかけで、他の園児を巻き込んで始まった「ラグビー」遊び。基本のルールはボールを蹴っても、持って走ってもよいということのみで、他は園児が自由にルールを発想し、決めたという。教師が遊びを支えるため、ユニフォームであるビブスを2色用意したが、どちらの色を選んでもよいという自由度があり、人数に偏りがあってもかまわない。A児という4歳児の事例では、ボールをなかなか取れず泣いていたが、決してあきらめない園児の姿があった。

この自発的な遊びで発現するコンピテンシーは、「創造的思考力」「協働力」「自己制御力」が挙げられる。本格的なルールをほとんど知らないため、自由な発想でルールを考える「創造的思考力」、集団でゲームに取り組む「協働力」、自己を律し粘り強く取り組む「自己制御力」である。また、遊び自体は直接の対人葛藤ではないが、年長の園児が年少の園児にあえて手加減せず教師も過剰な手助けをすることなく遊びが行われることから「問題解決力」につながる子どものレジリエンスを育成しうるとみられる。

異年齢間で行われた本実践において、触れ合いを通して仲間意識を醸成し、園児のウェルビーイングにもつながる実践であるといえる。